

周作クラブ会報

(第51号)
2013年6月20日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

遠藤周作・生誕90年関連
講演／ミサ／対談
1面〜7面
連載「遠藤周作さんの思い出」
最終回 9面
長崎文学館便り・学芸員の
退任／就任挨拶他 10〜11面

遠藤周作・生誕90年記念講演／抄録

生誕90年に思う我が遠藤周作

宇宙棋院の思い出と遠藤文学の原点

「神々と神と」「堀辰雄論覚書」ほか

黒井千次

いたすら電話と宇宙棋院

1980年代の初めごろだったと思います。ある日、変な電話が掛かってきました。たどたどしい日本語で、自分は台湾の日本文学研究者だが、「源氏物語」について話が聞きたい、というのです。いっこうに要領を得ないのですが、ともかく対応をしているうちに、はっと気がつきました。遠藤周作さんが、若手の作家にいたすら電話を掛けては、からかっているという噂を思い出したからです。

それからしばらくして、あるパーティーで遠藤さんを見かけ、挨拶しました。このときが初対面です。それとなくいたすら電話のことを匂わせたのですが、遠藤さんは否定も肯定もしませんでした。ですが僕は、遠藤さんとの最初の

出会いが、いたすら電話であったことを確信しています。

その後、ある文学賞の選考会で、一緒にさせていただいた折、誘われて碁を習うことになりました。遠藤さんは吉行淳之介さんをしきりに誘ったのですが、吉行さんがいやだと断わり、僕が、よろしかったら一緒に一緒に、ということになって、プロの棋士に教えてもらうことになったのです。

それがきっかけで、宇宙棋院が誕生します。物書きと新聞記者と編集者で碁が下手くそな者、女性は職業不問、ということで開催を集め、1983年にスタートしました。毎週木曜日が例会で、木曜の朝になるとまだ寝ているのに、よく遠藤さんから「今日は来るか」と電話が掛かってきました。遠藤さんは、負けると

悔しいので、自分よりちょっと弱い僕を誘うのです。

ある雑誌が、「周作十番勝負」というのを企画して、遠藤さんと各界の碁好きの名士との対局を連載したことがありまです。ですけど5回戦まで全敗、6回目に僕が対戦相手に選ばれて、遠藤さんはやっと一勝できました。それ以来遠藤さんは、僕のことを「小金井のお助け爺さん」と呼び、負けがこむと僕を相手にするようになるのです。



遠藤周作について語る黒井千次氏

なおこの十番勝負（遠藤さんの3勝7敗）の模様は、『狐狸庵先生のこう打てば碁が下手になる』というタイトルで単行本になりました。大変おもしろい本だと思のですが、さっぱり売れなかったようです。（笑い）

そのうち、遠藤さんがノーベル文学賞の候補者といわれ、毎年10月中旬の発表日の木曜夜になると、宇宙棋院の看板を掲げる曙橋の碁会所に、新聞記者やカメラマンが待機するようになりました。そんなときでも、知らぬ顔でバカな冗談をいいながら碁を打っていた遠藤さんの

姿が、今も記憶の中に強く残っています。

評論から小説へ

遠藤文学についても、少しお話ししたいと思えます。遠藤さんは、純文学から歴史小説、ユーモア小説と幅広く、エッセイも真面目なものから狐狸庵ものまで、また戯曲など、小説以外にも膨大な作品を残しています。しかし、小説家としてスタートしたわけではなく、評論家として出発したことに注目すべきだと思います。

24歳のとき書かれた「神々と神と」と、25歳のときの「堀辰雄論覚書」を嚆矢として、多くの評論やエッセイを書きます。「アデンまで」で小説家としてデビューするのは30代になってからです。しかし、最初に書いた「神々と神と」と「堀辰雄論」で、遠藤さんは終生のテーマを提示し、そのテーマを追い続けて、集大成としての「深い河」に至ったのだと思います。「神々」とは汎神の世界であり「神」は一神教すなわちキリスト教です。いいかえれば東洋と西洋。そして人間と神々、人間と神の問題です。評論という論理的な展開だけではこの問題を追及しきれずに、遠藤さんは、小説の中で架空の人間を自在に動かすという手法で、この問題に迫ろうとしたのだと思います。

没後17年が経ちましたが、今後も折にふれて、遠藤さんのこと、そして遠藤作品を振り返っていきたいと思います。

(文責・高橋千劍破)